

スギが、連の軍事介入をほめ、ポランド自身の抵抗の強さを懸念してポーランドに「おまかせのまゝ」といふ形式をとり、たゞおまかせだ。

軍事制樹立を周到に準備したクムリン

クムリンの官権は、おぼろげのメーネロフカニヤ会談の二二日に「連帯を確立する」がないう見こみ、軍事的手段で「連帯」を破壊する決断を下し、その機をうかがった。そのために一方では、國軍制樹立を連帯に忠誠を誓う持札と入れかえ、他方、党内「改革派」をけずりおとし、連帯を固めることを迫るが、カニヤによって連帯を決定づけられた。そこでクムリンの官権は、カニヤに見切りをつけ、「連帯」の一回全軍大会での左傾化を懸念し「等に「連帯」を軍事的に破壊し、軍事制樹立を形成するために「臨時体制」をととのえた。クムリンの官権の側からするならば、ヤルゼルスキを頭目とする「愛護主義者」を懐疑し、國内親シキの活動を手段としてつき動かす、ソ連軍のインシマテイスの発動による程度まで親シキの再編された國軍と自治部隊を手合として、ハズ・ロ・武蔵やVが進行されたのである。

そこで、「」のようは軍による強権的軍事的支配体制を樹立させ、危機の進行の速さをかき消す方式は、後進國への「軍師の輸出」方式と同様の軍事工学主義・軍事技術主義の発想がうかがわれる。

「」の「」にてまずクムリンの官権が、ヤルゼルスキ軍事制樹立をもちだした危機をのしきつとくするのには、親シキの倒壊の危機だけにあるのではない。それは、「連帯」の樹立による「連帯」の「三層性」といわれる経済的危機が政治的危機に転化することを彼は恐怖してゐた。

ポーランド労働者の闘いの意義と限界

ポーランド労働者は、困難な中での闘いをともなう不況に闘い抜いてゐる。

その年の夏、ポーランド労働者は、スターリニスト官権に對して、「絶えず國家から独立した自由労働組合の承認や特権の廃止など」を要求をあげ、MKS（工場間ストライキ委員会）を結成してスターリニストに對し、そ

て勝利した。そして、彼らは官制中絶を解いて「連帯」を結成しながら社会的経済的權利の獲得を實現してゐた。それは、党と政府の「体制内化」の攻撃がクムリンの軍事的脅威をね返しながらの闘ひだ。そこで「連帯」は一回大急において「自主管理は祖国」の綱領を採り、全國委員会は、「自主管理」「自由選挙」を要求し、國民投票を呼びかけるにいたつた。

だがそこにかけの隠微をはらまれている。「自主管理」要求とは、「官権の領地を少しすく」といふこと、つまりものであり、國家を束縛して行くところか、國家から威嚇を生み出すものである。そこで「自由選挙」もまたそれが實施されるならば議会はたまたまスターリニスト支配の具たりえなとなり、スターリニスト官権に「権力奪取計画」とみなされてしまふのである。ポーランド労働者は「ポランド社会主義」を社会主義として無自覚的に前提してゐる。それはスターリニズムの本質に彼が無自覚であつたことなのだ。彼らが敗北した根拠もここにあり。われわれは彼の敗北を教訓化して行くのでなければならぬ。

日共の民権系諸君の沈黙は労働者への闘いの弾圧を意味する

日共の民権系諸君はどうか考えられているのか。岸中氏は「是處で有名な」「言論道断」「非難」など「非難のポーランド」といふが、事態の責任は「連帯」の「反社会主義分子」にあるといふのだ。だが「連帯」の「自由選挙」「自由正候補」「秘密投票」の要求をすて、ヤルゼルスキは「反社会主義分子の政府転覆の企て」と言つてゐるのだ。このヤルゼルスキと彼を非難する日共とだけ違ひがあるというのか。日共の態度は「連帯」の政治権力者たちの官権主義、腐敗、自主性の欠如などというが実は、社会主義の政府である現在の政府を転覆するのには反社会主義で「反革命だ」といふドグマにとりつかれてゐるのだ。

だが考えるべきは、労働者、人民の大多数の支持を失ひ、軍事力をも、この維持できない「社会主義」とは一体何であるのか。彼ら日共の「軍政」「非難など」といふせしワルシツク官権の立場は、上でのものではない。彼らは、権力者がいかに腐敗して行つても、労働者から支持を失つたとき、ポーランドは「社会主義」であると考えられている。だから、彼らは「軍政打倒」といふ口がけを言ふない。日共の「軍政非難は、自らの軍が打倒して行くからである」といふ。いんちポーランド「社会主義」と自らの別れたてを言つても、下野の民権系や一般大衆をたぶらなことはできない。すなはちこの「社会主義」は「社会主義再建」の神話に過ぎず、日共を弾劾し、ポーランド人民と連帯して闘つてはならない。